

Title	動機付けと合理性
Sub Title	Motivation and rationality
Author	木原, 弘行(Kihara, Hiroyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1999
Jtitle	哲學 No.104 (1999. 12) ,p.15- 32
JaLC DOI	
Abstract	I will discuss one of the problems about motivation; that is, 'What motivates one to do an action?'. Although motivation may also be an important topic in connection with beliefs and thoughts, I will focus on human actions in this paper. It's not difficult to give some candidates for an answer to the question 'What motivates one to do an action?'. The most familiar one is, probably, desire, or some people may think that belief can motivate a person by itself. I, however, want to examine reason for action as the candidate to begin with. For, on one hand, even though it seems obvious that a person who thinks she has a reason for some action is motivated to do the action in question, its adequacy has been argued, especially in ethics; on the other hand, as long as there is a problem whether one must have both desire and belief or just belief in order for her to have a reason for action, it is inevitable to say something about desire and belief with respect to reason for action, anyway. Paying attention to irrationality found in actions, I will consider these things.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000104-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

動機付けと合理性

— 木 原 弘 行* —

Motivation and Rationality

Hiroyuki Kihara

I will discuss one of the problems about motivation; that is, 'What motivates one to do an action?'. Although motivation may also be an important topic in connection with beliefs and thoughts, I will focus on human actions in this paper.

It's not difficult to give some candidates for an answer to the question 'What motivates one to do an action?'. The most familiar one is, probably, desire, or some people may think that belief can motivate a person by itself. I, however, want to examine reason for action as the candidate to begin with. For, on one hand, even though it seems obvious that a person who thinks she has a reason for some action is motivated to do the action in question, its adequacy has been argued, especially in ethics; on the other hand, as long as there is a problem whether one must have both desire and belief or just belief in order for her to have a reason for action, it is inevitable to say something about desire and belief with respect to reason for action, anyway. Paying attention to irrationality found in actions, I will consider these things.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

ここでは動機付けとは何かということを、「何がある行為をするように動機付けるのか」というかたちで考える。信念や思考に関しても動機付けが問われることもあろうが、ここでは対象をさしあたり主として行為に限ることにしたい。もちろんここでの考察は心的行為へも適応できる可能性は十分にある。

「何が動機付けるのか」という問いに対する答えには、すぐさまいくつ候補が挙げられる。例えば欲求はおそらくもっとも無難な候補だろうし、また信念も行為を動機付けると考えられるかもしれない。しかし、まず手始めに、私は行為の理由をその候補として検討するつもりである。自分にはある行為をする理由があると考えている人がその行為をするように動機付けられるのは一見したところ自明のように思われるにもかかわらず、このことをめぐる議論が、特に倫理学に関連して問題となっており、また一方で、そもそも行為する理由があると言えるためには、欲求と信念がなければいけないのか、あるいは信念だけでよいのかといった問題もあって、いずれにせよ理由との関連で欲求や信念について論じなくてはならないからである。この論考では、これらのことを行為における非合理性に注目することを通して考察していく。

1. 内在理由と内在主義

理由を帰属する文には二つの解釈があると、バーナード・ウィリアムズは主張している⁽¹⁾。その一つは「(ある人) Pが(ある行為) Aをする理由がある」という文が真であることによって、Aすることで満足させられたり、または満足へと導かれるような動機をPがもっていることを含意する解釈であり、そのような動機がないならばこの文は偽となる。もう一つは、そのようなPの動機の有無にかかわらずその文が真となるような解釈である。前者のような解釈での理由を内在理由、後者を外在理由とウィリアムズはよんでいる。そして、ウィリアムズの議論によれば、外在

理由は存在せず、内在理由しかないことになる。実際には、今述べたような特徴付けは議論のためには不十分であり、その詳細はすぐ後にもう一度検証するが、少なくともウィリアムズがなぜ内在理由を持ち出してくるかの一端は、行為理由の説明的な側面と関連している。理由が行為を説明するのであれば、説明の要素として不可欠な行為者の動機を含まねばならない。いいかえれば、行為の理由が行為者を動機付けることがないならば、当の行為をしたときにその理由はなぜそうしたかを説明できないだろう。

だが、これだけでは外在理由を排除することにはならない。むしろ、この主張は倫理学で問題となる内在主義とほぼ同じである⁽²⁾。ウィリアムズの議論が行為一般についてのものであるのに対し、内在主義と外在主義は倫理的行為に関するものであるが、ここで内在主義とよばれるものは倫理的命題が真である（当てはまる）と判断した場合、そのこと自体が動機付けを保証するという見解である。外在主義はそれだけで動機付けに十分ではなく、例えばそのほかに何らかの強制力が必要だと主張する。外在主義の代表例として T. ネーゲルは J. S. ミルをあげている⁽³⁾。ミルは功利の原理の真理を認識することと、それによって動機付けられることは別のものであると論じているからである。もし倫理の事例からの拡張がゆるされるならば、一般に A する理由が A へ動機付けるとする見解は内在主義であり、また行為者の動機の存在を含意している点でこの理由は内在理由である。

行為理由の説明的性格からウィリアムズは明らかに上に述べたような内在主義を採っている。しかし、用語上の紛らわしさはともかくとして、内在主義を採るからといって外在理由を排除することにはならない。内在理由／外在理由の区別と内在主義／外在主義の区別はまったくちがったものである⁽⁴⁾。ここで、もう少し詳しくウィリアムズの議論を見ていく必要がある。すでに基本的な考え方を見てきたように、内在理由の解釈によれば、P に A する理由があるのは「A することで満足させられるか、ある

いは満足へと導かれるような要素を、P は主観的動機の集合 (subjective motivational set, 以下 S) のうちにもっている」ときかつそのときに限られるとされる⁽⁵⁾。ここで S の要素として典型的には欲求を考えればよいが、ただし、ウィリアムズは欲求を広く解釈していて、価値評価の傾向、情緒的反応のパターン、個人的忠誠、いろいろなプロジェクトなども含めている⁽⁶⁾。さらに、ウィリアムズによれば、S の要素はする理由があるとされる行為と適切に (合理的に) 関係づけられなければならない。このとき考えられている関係付けは、実践的推論である。したがって、「内在理由の言明は熟慮的な推論 deliberative reasoning において発見されうるものである」(Williams (1981), p. 104) とされている。すぐに思いつくのは、この実践的推論がある目的を成し遂げるための手段の発見にしか用いられないのではないか、ということである。たとえばアリストテレスの三段論法、ヒュームの行為における理性の役割を思い起こせばよい。しかし、ウィリアムズはこの熟慮のプロセスを想像力の余地あるものとして広くとっている。

内在主義自体は、理由があると判断するためにある種の推論を経てからでなければならないということは要請していない。まして、その推論の出発点となる S の要素が (あらかじめ) なければならないとも主張していない。したがって、内在主義をとっても内在理由しか存在しないという立場をとらないということは可能である。事実、J. マクダウェルはこの路線で外在理由を擁護している⁽⁷⁾。P が自分には A する理由があると判断することによって A に対して動機付けられたとしても、その判断の前から「P には A する理由がある」ということが真であるならば、この文は P の S の要素と無関係に (つまり P の動機の有無にかかわらず) 真であることになるのだからこの理由は外在理由ということになる、とマクダウェルは述べている。マクダウェルの見解は後でふれる。また、熟慮のプロセスを経て理由があると判断しても (内在理由)、そのことによって動機付けら

れない（外在主義）ということも概念上は可能なはずである。ウィリアムズは前に述べた理由から内在主義をとっている。結果的にウィリアムズが内在主義と内在理由の説を組み合わせるに至った背景にはいろいろな要素があるだろうが、その中にはおそらく次のようなこともあるのではないかと推測される。つまり、理由が行為を動機付けるのであれば、その源泉は理性(reason)以外のところに求めなくてはいけない、ということである⁽⁸⁾。必ずしもSの要素ということで何が含まれているのかははっきりしないが、その名の示すとおりのSの要素は動機付けの力をもっているはずであり、内在理由の理論は、その力を熟慮のプロセスを経て理由があるとされる行為へと伝えていくのだということを主張しているように思われる。したがって、ウィリアムズのように行為理由が熟慮のプロセスを経て発見されなければならないと考えた場合、Sと関連がないなら、熟慮のプロセスや理由に関する判断は動機付けることはなく、外在理由は存在しない。もし内在主義が正しいとすれば、内在理由の理論を採らねばならない。あきらかに、ウィリアムズの議論を単純化した図式はD. ヒュームの考え方と類似している。理性は情念の奴隷であり、それだから情念に合理性を問うことはできないとヒュームは述べている⁽⁹⁾。そして、説明的性格と並んで、行為理由の特徴である合理性にかかわる側面についてもウィリアムズはヒュームを受け継いでいるように思われる。次の節では合理性を考察することにしよう。

2. 内在理由の合理性

理由は行為を説明するだけでなく、規範的な側面を持ち合わせている。しかじかのことをするのが理にかなっている場合に、私たちはそうする(よい)理由がある、と言いたくなる。行為理由についての考え方の一例として取り上げてきたウィリアムズの内在理由は、合理性に関しては次のように述べられている(Williams (1981), p. 102)。例えばある人が石油の

入っている瓶を、ジンが入っていると間違えて信じ、またジントニックを飲みたいと思っているとしよう。この場合、この瓶とトニックを混ぜる理由がこの人にあるだろうか。ウィリアムズは、ないと主張する。もし実際にこの人が混ぜた場合、その行為は、ジンが入っているという（間違った）信念とジントニックを飲みたいという欲求によって説明され、この説明は理由による説明であるといえるかもしれないことは、ウィリアムズが認めている。しかし、ウィリアムズは、本当は石油である液体とトニックを混ぜるのは、ジントニックを飲みたいという欲求に照らし合わせれば、非合理的なことであり、この点を考えればこの人にそうする理由はない、と述べている。私自身は少なくともある理由から説明可能であるのならば、非合理的であるとは必ずしも考えないが、これについては後ほど述べる。ともかく、ウィリアムズが言いたいのは、理由はこのような仕方で客観的な合理性とかかわっているということである。そして、さらに重要なことに、合理性は内在理由の合理性しか問うことができないと主張しているのである。

内在理由の意味で非合理的であるのは、上の例でいえば2つのケースが考えられる。第一に、ジントニックを飲みたいという欲求が先にあり、それを満たす手段として誤って石油の入った瓶をジンの入っている瓶と信じてしまうケースである。第二は、この誤った信念がまずあって、それに基づいてジントニックを飲みたいという欲求が生じる場合である。第二の言い方は適切ではない。というのは実はこの2つは大きく違うわけではないからである。後者の場合、たとえこの瓶に入っているのが石油だということを行為者が知ったとしても、ジントニックを飲みたいという欲求はおそらく消えないだろう。むしろこの欲求を満足させる別の方法を考えるだろう（もちろん、手近に利用できるものがなければ、あきらめる場合もあるが、これは上の意味で消えるのとは違う）。もし消える欲求があるとしたら、それはこの瓶に入っている液体とトニックを混ぜたいという欲求

となろう。ところが、第一のケースでも、もし誤りを知ったならば、同じ結果になるだろう。したがって、結局、第二のケースで「ジントニックを飲みたい」という欲求は「この瓶に入っているのはジンである」という信念に触発されたのかもしれないが、基づいているわけではないことになる。つまり、いずれにせよ、ここでの非合理性は「ジントニックを飲みたい」という欲求について言われているわけではなくて、この欲求を満足させる手段・方法に関して言われているのである。あるいは、合理性はSの要素と相対的に決まる、と言い換えてもよい。

しかし、これで合理性を問うに十分だろうか。

3. マクダウェルの反論

私たちはときとして、当人のSに関係なく、その状況からある人には理由があると言いたくなる。ウィリアムズの用語に従えば、外在理由になる。このとき、そうすべきだ、そうするのがよいという意味で、私たちは合理性について語っている。あるいは、語っているつもりになっている。この「つもりになっている」場合があるために、ウィリアムズは内在理由の合理性しかとらない。彼いわく、外在理由の合理性は「はったり bluff」にすぎない (Williams (1981), p. 111)。すべてのこうした合理性の主張がはたして「はったり」であるのかはまた検討せねばならないが、ここでは外在理由擁護派のマクダウェルの見解を見ておきたい。

マクダウェルのポイントは、理由によって動機付けられていない状態から、理由を信じることで動機付けられる状態への移行を問題とすることにある。争点であるのでウィリアムズ自身の言葉を引用しておく。外在理由の存在を認めるならば、外在理由の主張はつぎのことを含まねばならないとウィリアムズは述べている。

行為者が動機 (motivation) を獲得するのは理由言明を信じるようにな

るからであり、さらに、何らかの仕方で、彼が物事を正しく考えている (considering the matter aright) から、後者「理由言明を信じること」をするのでなくてはならない⁽¹⁰⁾。(傍線原文イタリック, [] 内引用者)

ウィリアムズの議論はここから次のように進む。もし物事を正しく考えた故に理由があると信じたのであれば、それは実践的推論などの熟慮のプロセスを通じてのみ可能であるはずである。ところが外在理由の定義により、外在理由が帰属される人は熟慮を始める要素を S にもたない。出発点を S にもたねば動機付けの力をもたないので、内在理由しか存在しないことになる。

中立的に概観しても「物事を正しく考える」という言い方は曖昧すぎる。事実、マクダウェルは、動機付けられない状態から動機付けられる状態への移行が「物事を正しく考える」ためになされたとしても、それがどうして必ず熟慮のプロセスを経なければならないのかという疑問を提出している。いや、それどころか、理由があると信じることで物事を正しく考えるようになるのではないかということをも示唆している。熟慮のプロセスを経ずに理由によって動機付けられるようになることの例として特別神秘的なことをあげる必要はない。たとえば、アリストテレス風にとらえれば、倫理的なしつけは適切な行動様式を慣習化することでなされたとすると、特定の動機や実践的な関心が熟慮のプロセスなしに獲得されるようになる。またより劇的な例としては、改宗 (conversion) があげられる⁽¹¹⁾。

この二つの立場の違いは合理性をどのように考えるかの食い違いに由来していると思われる。ウィリアムズは「物事を正しく考える」という言い回しで合理性の要請をしているのだが、先にも述べたように彼にとっての合理性は S (の要素) と相対的にしか問われることはない。このことは議論の結果ではなく、あらかじめ前提とされているように思われる。だか

ら、このように内在理由の合理性だけをあらかじめ理由を信じる際に要請すれば、結果として内在理由しか残らないのは当然である。前節と同様ここでも改めて、そもそも内在理由の合理性で十分なのか否かが問われなくてはならない。

4. 本当の非合理性

私は内在理由の合理性では不十分であると考え、もう一度、ウィリアムズが非合理性の例としてあげていた、石油でジントニックを作ろうとする人のことを思い起こそう。M. コースガードは「実践理性の懐疑主義」というすぐれた論考の中で、これは「本当の非合理性」ではないと指摘している⁽¹²⁾。彼女が言おうとしているのは、単なる間違いは非合理性と呼ぶことはできないということである。先ほども私が示唆しておいたように、おそらくこの人が自分の誤りに気が付いたならば、目の前の液体をトニックと混ぜようとは思わなくなるであろう。それはこの人が合理的に判断しているからではないのか。この人は物事を正しく考えているとは言えないだろうか。もちろん理性的な人でも単なる間違いをすることがある。例えば、教室に何人の人がいるかを間違えて報告してしまった人のことを、嘘をついているとは言えないように、行為の非合理性についても単なる間違い以上のことが含まれるはずである。

もしこの人がジントニックを飲みたいと思っていて、目の前の瓶に本当のジンが入っており、正しく推論した結果、自分にはこの液体とトニックを混ぜる理由があると判断しつつ、なおかつそのように動機付けられないならば、これこそ本当の非合理性であるとコースガードは述べている⁽¹³⁾。私はこれはまったく正しい指摘だと思う。ところが、ウィリアムズが行為理由の説明的側面から内在主義をとっている限り、理由は行為を動機付けねばならず、この非合理性はあり得ないことになる。つまりこの場合、動機付けられなかったのだからジントニックを飲みたいという欲求が、他の

Sの要素と比べて十分強いものではなかった、ということになるか、あるいは実はそのように欲求していなかったことになる。では、コースガードの主張するような「本当の非合理性」を認めるならば、内在主義を捨てなくてはならないのだろうか。だとすると、理由を信じることと動機付けの間に乖離が生じ、結果として内在主義者のいう理由による行為の説明も放棄しなくてはならないと思われる。この問題を考えるために、私は改めて理由による行為の説明と合理性の関連について次節で論じることにする。

5. 行為理由の説明的側面と規範的側面

行為を説明するときに私たちはどのようなことを期待しているのだろうか。確かに行為に対する何らかの動機が必要なことは明らかであるが、しかし、その動機があって次に当の行為が生じたということだけでは説明にはならない。行為に関して因果説をとったとしても、ある動機的な心理の出来事の次にその行為が生じたというだけでは、原因と結果の関係を認めるのにすら不十分である⁽¹⁴⁾。ふつうの物理的なことがらを考えてみても、因果関係を認めるのに、ある出来事と別の出来事が継続して起こったというだけでは十分ではない。そこには何らかの物理的法則性がなければならないだろうし、それに照らして初めて因果的説明ができることになるだろう。行為の場合にも、おそらくそれに対応するような一般性が説明のために必要である。つまり一般的にしかじかの動機としかじかの信念をもっていて、したがって行為の理由がある人は、そのように動機付けられ、実際に行為するというものの理解がなくては、説明に必要なことがらになくなってしまふことになる。

この一般性は通常は合理性である。デイヴィッドソンが「合理性の構成的理想」と言っているものがこれに当たると考えられる⁽¹⁵⁾。いいかえれば、行為を理解可能にするために必要な規範だということである。これは後者のSに相対的に規定されるものだと考える必要はない。意味してい

るのは、合理的な人間であれば、しかじかの理由はしかじかの行為をするよう動機付けられるだろう。コースガードが述べているように、実際はこれが内在主義の主張するところだと考えることができる⁽¹⁶⁾。このように考えれば、内在主義は「本当の非合理性」の意義を認めることができる。もしなんらかの無気力性の人が完全に自分には理由があると判断しつつ動機付けられない場合があるとしたら、上で述べたような説明に必要な規範性に反するが故に非合理的なのである。動機付けられない可能性を認めるならば、行為理由は先に述べた規範性をもちうるだろうかという疑問が生じてくるかもしれない。これは道徳的な理由の事例を考えればよりはっきりする。もし道徳的に A する（例えばおぼれている人を助ける）べきだという判断があって、つまり自分には A する理由があると承知しておきながら、無気力性からそうしようとはしない人がいて、なおかつこの人は格別非道徳的な人でないとしたら、この理由は道徳として規範性をもちうるだろうか。結局は個人の心理的事実、例えば何を欲しているかとか、何に関心があるかといったことに相対的にしか、行為理由としての身分を保てないのではないか。それ以外の理由は単なる「はったり」ではないのか。だが、動機付けられるか否かという問題は、理由そのものの規範性の問いと別のことがらである。

例えば理論的なことがらと対照してみよう。小学校の算数の問題を例に採ろう。目の前に、二つの籠があって、ひとつには4個のリンゴがあり、もうひとつには3個のリンゴが入っているとする。そしてある子どもがちゃんとこのことを信じているならば、この子に合わせていくつかと尋ねた場合、しかもこの子が足し算をもう習って計算できて $4+3=7$ だと理解していても、なおかつ全部で7つだと確信しないことは考えられる。（この原因はあれこれ推測してもよい。例えば7という数字にかかわるトラウマがあるとか、リンゴが7個そろうとお化けが出るとおどされているとか。）しかし、算術の結論を確信しないからといって、理由の規範性

がなくなるわけではない。4+3=7 の正しさは、人が確信したりしなかったりすることとは別に確かめられるべきである。そして、実際、合理的な人であったなら合計で7個だと確信するだろうし、4+3=7 だというのはこの確信を説明するはずである。重要なのは、算術を正しく理解して結論を確信するというのは、マクダウェルが行為について述べていたのと同じように、教育や習慣化の産物だということである。繰り返すが、だからといって算術の正しさが習慣にもとづいているわけではない。それは別の問題である。いわば算術の理論の正しさが個人個人の心理状態と関係なくあって、教育や習慣はそれに合わせて個人が確信や信念をもつようにするということである。

内在主義の主張を以上のように解釈した上で、内在理由のみが存在するというウィリアムズの見解を再検討してみよう。合理的な人間ならば、正しく熟慮するであろう。だからしかじかの理由があるということで「合理的な人間ならば、そうするように動機付けられるだろう」ということを意味しているとする主張は、「ある人が正しく熟慮するならば、そうするように動機付けられる」ということを含むかもしれない。しかし、これはすべての行為理由が熟慮のプロセスを経た内在理由であるということにはならない。ある人のSと関係なく、ある状況の下で「しかじかのことをする理由がある」と外在理由を帰属する際に、「合理的な人間ならば、そうするように動機付けられるだろう」ということを意味していることはあり得る。そしてウィリアムズが正しく言うようにこの内容が「はったり」である場合もあるので慎重にならねばいけないが、しかしすべての外在理由がはったりである必要はないし、それは算術の場合と同様に、それが正当なものかどうかは別に議論すべき問題である。また、人間がある程度理解可能な人として生きていくために、一定の行動パターンを、ある合理性の構成的理想を通じて教育なり習慣なりによって獲得していく必要がある⁽¹⁷⁾。つまり、理由があるという判断に合わせて動機をもつようになる

のであり、おそらくは正しく熟慮をするようになるのである。こうした行為のパターンの獲得は、それ以前の行為者の S とは必ずしも関係しない。しかじかの状況では「合理的な人ならば、A するように動機付けられる」という意味で、行為者の S と無関係に A する理由があると言える場合は確かにある。この点で私はマクダウェルに同意して、外在理由の可能性を認めたい。

ウィリアムズはこのようなアリストテレス的な考え方はあまりにも理想的な合理的人間を相手にしすぎていて、個人にとってなにも教えてくれないと考えている。もし (R)「P には A する理由がある」ということが (G)「正しく熟慮する人（アリストテレスの言う *phronimos*）ならば、こうした状況で A するように動機付けられるだろう」と解釈されるならば、とウィリアムズは言う；

このように解釈された外在理由の説明によれば、(R) のタイプの言明は行為を人に関連付けるのではなく、行為のタイプを状況のタイプに関連付けている⁽¹⁸⁾

P について何も言っていないではないか、と主張しているのである。おそらく、合理性の理想が客観的にどれほど確固たるものかには疑問がある。また事実、それが安定したものだと考える必要はない。だが、このウィリアムズの反論は反論になっていない。行為説明の場面を考えよう。ウィリアムズが主張していることを考慮して、内在理由の解釈がまさに P について理由があるということを言っているのだとすれば、特定の P の S 要素と特定の A を関連付けることになる。すると、この内在理由と称するものが言えることは、せいぜい S の要素があって、それからなんらかの心理的プロセスがあって、A があったという、三つの個別的事実を並べることだけである。これは A の説明にはならない。というのは、ウ

イリアムズは理由は行為のタイプと状況のタイプを結びつけてはいけないといっているようなので、説明に必要な一般性を引き合いに出せないからである。この結論を避けるならば、(R)を次のように解釈しなくてはならない。

(GS) 「かくかくの S の要素をもっている正しく熟慮する人ならば、こうした状況で A するように動機付けられるだろう」

あきらかにこれは特定の P についてのみ語っているわけではない。しかも「かくかくの S の要素をもっている」というところを「こうした状況」の中に組み入れても支障はないように思う。だとすると、(GS) は外在理由の解釈 (G) の特殊ケースになる。これまでも述べてきたように説明のためにはある理想が必要である。いいかえればタイプについての理解がなければ説明は成り立たない。したがって内在理由は (GS) を認めなくてはならないし、だとすれば (G) を排除する理由はない。

6. 諸問題への帰結

理解可能なことをするのであれば、実践的推論の結果、しかじかのことをする理由があるという判断とそうする動機付けは一体であり、そのように行為するであろう。したがってこの理由は実践的である。アリストテレスが実践的推論の結論は行為である、というのもこの意味だろうが、より精確に言えばあきらかに理由はあるタイプの行為をする理由である。この個としての行為は結論でなくむしろ、合理的な人の実践的推論の結果である。ここで判断と動機付けは、基本的にはおそらく教育と習慣のために、まず一体となるのであろう。しかし、私は理由があるという判断や信念と、そうする動機付けが「乖離」することがあると認める。これは人間に非合理性を認めるために必要なことだと思う。判断しつつ動機付けられな

いならば、少なくとも判断された理由からは理解不可能であり、つまりは非合理的である。もちろんなぜ乖離が生じたかは説明できるかもしれない。例えば、神経症をやんでいたとか、「合理的な人ならば、そのように動機付けられる」ということを外在主義とよびたくなるかもしれないが、私はこれが理由による行為説明を可能にするのだから、合理性の条件付きの内在主義といたい。

上の乖離を認めることで私はアクラシアの問題もより理解できるようになると思う。ここで扱いきれるトピックではないので、ごく簡単にコメントしておく。Pが行為Aをする方が行為Bをするよりもよいと判断しつつ、にもかかわらずBを意図的で自由にするとき、この行為はアクラシアの（意志の弱い）行為と言われる。この非合理性はどのように考えられるのか。きっとPはAをしたい欲求とその遂行に関する信念をもっていると同時に、Bにも欲求と信念をもっているだろう。理由の欲求-信念モデルに従えば、PはAする理由と、Bする理由の両方をもっていることになる。（そうでなければ、AとBを対照させて比べはしないだろう。）Bするように動機付けられたということで、もともとのBにたいする欲求が強かったのだとすれば、Bする強い理由があったことになり理由だけによって説明できる（非合理性がなくなる）か、せいぜい制御できない欲求に屈したか（自由ではなくなる）、のどちらかであろう。いずれも上の意味でアクラシアはなくなる。もし理由と動機付けが乖離することがあることを認めれば、Aするよりよい理由があったのにBをしたことは可能になる。BにはBの理由があるのだから、説明できるではないか、合理的ではないか、というかもしれない。しかし、問題は「合理的な人間であれば、よりよい理由にあわせて動機付けられるだろう」ということに反しているのです。繰り返して言うが、動機付けがどうしてもこのような結果になったかは、Bの理由以外の説明があるかもしれない。あるいはそれを含めたものを行為Bの理由というべきかもしれない。これに

については留保しておく⁽¹⁹⁾。

結論をまとめよう。(1) 内在主義と内在理由を区別しなければならない。(2) 内在主義が非合理性を認めるためには、「合理的な人間ならば動機付けられる」という限定が必要である。(3) この限定は合理性の観点から行為は理解されるという意味で、行為理由の規範的側面と説明的側面を結びつけるものである。(4) このように考えるならば、外在理由も存在する。(5) また実践的推論やアクラシアの問題もこのような論点から再検討されるべきである。

もし以上のことに何らかの真理があるとすれば、理由には信念だけで不十分であるという議論は慎重になるべきである。この議論は、信念だけでは動機付けられないことがあるからという事実可依拠しすぎているように思われる。しかし、実際には欲求が含まれていても動機付けられないという事実も認めるべきだからである⁽²⁰⁾。

参考文献

- Altham, J. E. J. & Harrison, R., eds. (1995). *World, Mind, and Ethics: Essays on the Ethical Philosophy of Bernard Williams*, Cambridge University Press.
- Dancy, J. (1993). *Moral Reasons*, Blackwell.
- Davidson, D. (1980). *Essays on Actions & Events*, Oxford University Press. (邦訳『行為と出来事』服部・柴田訳、勁草書房、1990)。
- Hume, D. (1739/40). *A Treatise of Human Nature*, 2nd edition edited by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Oxford University Press, 1978. (邦訳『人性論』大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952)。
- Mele, A. (1987). *Irrationality: An Essay on Akrasia, Self-deception, and Self-control*, Oxford University Press.
- 黒田 亘 (1992). 『行為と規範』、勁草書房。
- Korsgaard, C. M. (1986). "Skepticism about practical reason", *The Journal of Philosophy* 83, pp. 5-25. Reprinted in Korsgaard (1996); pp. 311-334.
- Korsgaard, C. M. (1996). *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge University Press.

ty Press.

McDowell, J. (1995). "Might there be external reasons?", in Altham & Harrison (1995); pp. 68-85.

Nagel, T. (1970). *The Possibility of Altruism*, Princeton University Press.

Williams, B. (1980). "Internal and external reasons", in R. Harrison (ed.) *Rational Action*, Cambridge University Press. reprinted in Williams (1981); pp. 101-113.

Williams, B. (1981). *Moral Luck*, Cambridge University Press.

Williams, B. (1995). "Replies: Internal and external reasons", in Altham & Harrison (1995); pp. 186-194.

注

- (1) Williams (1980). ただし、以後、引用ページは Williams (1981) による。
- (2) 内在主義と外在主義については Nagel (1970) および Dancy (1993) を参照した。
- (3) Nagel (1970), p. 8.
- (4) この区別をはっきりさせようという立場のものに Dancy (1993) があげられる。しかし、これを論じた人の中には内在理由を内在主義と同じ主張か、またはその一形態と見ていると思われる人も多い。例えば、Korsgaard (1986) は内在主義批判の対象にウィリアムズを引き合いに出している。実際に、ウィリアムズは内在主義に同意しており、そのためには内在理由の説も採らねばならないと考えているようなので、問題はないのかもしれないが、私にはこの区別は重要だと思われる。
- (5) Williams (1981), p. 101.
- (6) Williams (1981), p. 105. このような考えはデイヴィッドソンの賛成的態度に近いかもしれないが、欲求の拡大解釈と言える。Davidson (1980) の第一章を参照。
- (7) McDowell (1995).
- (8) 同様の指摘について Korsgaard (1986), McDowell (1995) を参照。
- (9) Hume (1739/40), p. 415.
- (10) Williams (1981), p. 109.
- (11) McDowell (1995), pp. 72-73.
- (12) オリジナルは Korsgaard (1986) だが、以後の引用ページは Korsgaard (1996) による。

動機付けと合理性

- (13) 「本当の非合理性」については Korsgaard (1996), pp. 318-319 で述べられている。
- (14) 私自身はいわゆる「行為の因果説」には同意しない。しかし、その問題をここでは論じる余裕がないために、因果説について中立的に述べている。
- (15) Davidson (1980) の Essay 11 (邦訳では第八章) “Mental Events” を参照。またマクダウェルは説明には理想と現実の間の ‘gap’ が必要だと述べている (McDowell (1995), pp. 76-77)。おそらく、個別的なものは、一般的(理想的)なものに照らし合わせて説明されるということを意味していると考えられる。
- (16) Korsgaard (1996), p. 320, また p. 328 を参照。
- (17) このような行為者としての人格概念に関して、黒田 (1992), pp. 74-77 を参照。
- (18) Williams (1995), p. 190.
- (19) この問題については Mele (1987) にまとめられている。
- (20) この論考をまとめるにあたって、慶應義塾大学の西脇研究室のみなさんにご教示いただきました。